



佳作

私の夏休み

垣田 紗幸

その日は、とても夏らしかった。暑いけれど、青く晴れた空がとても気持ちよかった。私は、祖母と畑に来ていた。畑には、祖母が心を込めて育てている野菜がたくさんある。トマトやキュウリ、ナス、ウリ。畑は、夏が一番きれいだと思う。

私たちは、まず野菜を収穫した。それから今日の最も大切な仕事、草取りにとりかかった。私は、祖母に、「今日は、草取りを手伝ってもらおうか。」と言われた時、きつと畑のあぜ道に生えた草でも取るんだろうな、と思った。しかし、その予想は違っていた。私の目の前にある草たちは、もつと堂々と生えていた。きちんと耕され

た畝一面に、青々と草が生い茂っていた。新鮮な黄緑色で、少し抜いてしまうのがもつたないくらい、きれいに生えていた。私は、草取りが嫌いでではない。だから、少しやる気がでてきた。

私と祖母は、畝の両端にかがんで、草取りを始めた。昨日降った雨のお陰で土が湿っていて、だいぶ草が抜きやすい。

「やっぱり二人いると仕事がかどるねえ。」

そんな事を笑いかけながら私に言ってくれる祖母。少し恥ずかしいけれど、嬉しい。しかしはかどると言っても、なかなか草は手強い。手慣れた様子で草を抜いていく祖母は、なんだか格好いい。

私は毎年、夏休みになると祖母の家に行く。中学生になって、夏休みも忙しくなってきたけれど、必ず二、三日は泊まる。祖母と畑に行ったり、買い物に出かけたり、ただのんびりと昼寝をしたり。この場所で過ごすことが、私の夏休みにはかかせない。けれど、今年はこの場所に、大切な人がいない。私の祖父、祖母にとっては大切な巨

那さん。

祖父は、おこると怖い。そして、少し頑固。だから私は少し苦手だった。けれど笑うと、とても優しい顔になる。そして手先が器用で、物を修理する事が得意。

祖父は、足腰が悪かった。だから畑仕事をする時以外は、たいてい居間にいた。そして私がお家を訪ねると、いつも

「よく来たね。久しぶり。いらっしやい。」

と、私を迎えてくれた。しかし、そういう祖父の顔はたいてい無表情で、私は少し複雑だった。けれど、後から祖母が、

「おじいちゃん、紗幸ちゃんはまだ来んのか、なんてずつと言ったのよ。」

と、楽しそうに言うから、なんだか嬉しくなった。

けれどそんな祖父はいない。去年の冬、亡くなった。私は、悲しかった。祖父の死は、突然だった。夜中に目覚め、トイレにでも行くこうと立ち上がり、ころんで頭を

打ってしまった祖父。別の部屋で睡眠薬を飲んで寝ていた祖母は、その事に気がつかなかった。そして翌朝、祖父は冷たくなっていった。その日の内に祖母の家に行き、幾度かそんな話を聞いた。なんだか呆気なかった。悲しかった。けれど実感がなくて、なんだかぼんやりしていた。お葬式では、涙が出た。けれどやっぱり実感はなかった。時は過ぎていって、なんとなく悲しさも減っていた。

私が最後に祖父に会ったのは、去年の夏休みだった。私にとって大切な夏休み。そこに祖父がいないのは初めてで、さみしい。でも私が祖母の家に行くのは、夏休みや冬休みぐらいで、普通に暮らす中では、もう悲しさは感じていなかった。

もちろん、祖母にとっても、祖父を失った夏休みは初めてだ。夏休みはおろか、普通の日々に、祖父がいないのだ。祖母がどんな風に暮らしているのか私は考えもしていなかった。祖母の事だから、きっと元気に過ごしているのだろうと思っていた。

私は、祖母の事を尊敬している。祖母はいつも笑顔で、よく働く。すっかりした人だと思う。居間には『心の健康笑笑顔』と書かれた紙が貼つてある。私を知る祖母は、いつもこの言葉を表したような姿だ。または、この言葉のように生きようとしている人だ。

草は少しずつ、でも確実に私と祖母によって抜かれていく。だんだんと、水々しい茶色の土も見えてきた。

「やっぱり暑いね。」

「そうだね。」

「学校は楽しい？」

「まあまあ。楽しいかな。」

そんな事を時々話しながら、やっとハメートル程の長い畝の一メートル程、草を抜いた。私は小さな達成感を感じていた。

「おじいちゃんがいないと寂しいね。」

そんな時、祖母が呟いた。独り言かも知れない。けれど、なんだか祖母がとても寂しそうに見えて、私は

「そうだね。」

と言った。

祖母は祖父が死んだことを、ずっと後悔していた。祖母は去年の冬、なかなか寝つけない日が多かったらしい。そして、ある日睡眠薬を飲んで寝た。そして翌朝、祖父は死んでいた。祖母は、もし自分が薬を飲んでいなかったら、気付いたかも知れないのにと、とても後悔していた。

「おじいちゃんが死んでから、しばらくは外に出たくなくてね。ごはんもカップ麺で済ませたりしてたの。そしてとても夜が怖くて、いつも朝になれって思ってた。」

私は、驚いた。いつも笑顔で一生懸命働いている祖母。そんな祖母がこんな気持ちでいたなんて。私は祖母が、なんだか小さく見えた。祖母が、ただのおばあちゃんに見えた。

「それでね。いい加減危ないからって、病院に連れていかれたの。そこで医者さんに『ニワトリが先か卵が先か。』って聞かれたの。それで、ああ私、まともな人に

思われてないんだなって思っつて、『分かりません。』つて答えたの。」

祖母は、軽く笑った。私は、また驚いた。そして、少し悲しくなった。

「そしたらお医者さんが、『私も分かりません。きっと大丈夫ですね。』つておっしゃつてね。なんだか私、ほつとしたの。紗幸ちゃんは、どっちが先と思う？」

私だつて正直に言うつと、分からない。それに、どっちでもいいと思う。けれど、こんな風に真剣に、でも少し目が笑っている、そんな祖母に聞かれると、なんだか答えなければいけないような気もして、

「ニワトリ、かな…。」

と答えた。すると祖母は、

「じゃ、そのニワトリはどこから来たの？ やつぱり卵もいるよね。」

と言つて笑つた。ニワトリが先でも、卵が先でも、どっちでもいいと私は思つた。けれど、どっちも必要なものだ。祖母が苦しんでいた事は、とても悲しい。けれど今

は笑っているから、とても嬉しい。それは、勝手な私の思い。祖母には、苦しむ事も笑う事も、必要だ。

「ねえ、おばあちゃん。今はもう元氣？」

私は、そつと聞いてみた。

「うん。大丈夫。こうやつてみんなが来てくれるしね。それに、おじいちゃんが見守つてくれているからね。」

と、優しく答えた。

「そつか、そうだね。」

「おじいちゃんも、もうご先祖様になつたのよ。毎日感謝しないとね。」

氣付けば、草取りをする手はだいぶ進んでいた。畝の半分程まで来ている。きれいな黄緑色の草の下に隠されていた土が見える。

「もうだいぶ時間が経つたね。そろそろ帰ろうか。」

祖母が立ち上がりながら言つた。

「うん。結構頑張つたね。」

本当は、この畝の草だけでも、取つてしまいたい。けれど、

もう草取りを始めて二時間近く経っていた。そういえば、少し涼しくなってきた。でも、相変わらず、空は青くてもきれいだ。

野菜をたくさん乗せた一輪車を押す、祖母の背中を見つめる。祖母は、人生の半分よりもっと多くを、祖父と共に生きてきた。祖父が亡くなって、とても寂しかっただろう。まだ祖母の人生の四分の一も生きていない私が、祖母にできる事は、こうやって一緒にいて、話を聞く事くらいだ。祖母の心が少しでも軽くなっていてくれれば嬉しい。

もうすぐ、盆に入る。ご先祖様は、行きはキュウリの馬で早く来て、帰りはナスの牛でゆっくり帰るらしい。祖父も帰ってくるのだろうか。

今年の夏休みは、少し特別だ。